

# アース・ノックカーズ

かぶらやこうし  
鏑谷 晴矢

低くしむ音を立てて採掘用リフトが上がってきた。

サロウは、絶妙なタイミングでモーターのスイッチを切る。

「どうだった？」

「この穴もダメだね」

大柄なエレンが、ボヤきながら小さなドアを肩で押し開けて出てきた。

「見込みなしだよ。何も出やしない。山向こうのC坑の方が脈がありそうだ」

「ダメダメ。あそこは、サミイのヤツが、さんざん掘り尽くしたあとだから」

続いて出てきたイーヴァが、太陽をまぶしそうに見上げながら反論する。

「やっぱり、新しい縦穴を掘らないとダメかな」

サロウが心配そうな声を出す。

「でも、そのためのモグラはどうするの？、あたしは、サミイのヤツに頭を下げるなんてごめんだよ」

最後にエレベーターを降りたレイラが、肩にかついだ削岩機を地面におろしながらいった。

モグラとは、巨大なドリルが先について二人乗り掘削マシンの総称だ。

「まったく、サガラ台地みたいな硬い地面を無理やり掘るから、あたしたちのモグラが壊れるんだよ」

そういつてエレンが口をとがらした。

「しよがないさ、博士が、あのあたりにブツが埋まっていそうだといいうもんだから」

イーヴァがなだめる。

「それだけだよ。本当に博士を信じていいのかな」

ところどころ錆びの浮いた、傷だらけのサンド・バギーに機材を積みながらレイラがいった。

「どういう意味だ？」

尋ねるイーヴァの目をまつすぐ見つめ返してレイラが答える。

「そりゃあ、博士には感謝しているよ。あたしらみたいな腕のないアース・ノッカーズが、このクロエで曲がりなりにもやっていけるのは、あの人のアドバイスがあればこそだし……でも、最近のあの人は、なんだかおかしい——」

惑星クロエには海がなく、大部分が砂漠で、水は地面に穴を掘って、湧き出る地下水を利用していた。

生活のためのエネルギーは、すべて太陽電池でまかなっている。

固い岩盤を貫いて穴を掘る「モグラ」、砂漠を走り回るための「サンド・バギー」、緊急用に、空中の水分を集めて飲み水を作る「水タマゴ」。それらすべては電気で動いているのだ。

しかし、人々は、誰ひとりとして、それがどういった理屈で動いているかを知らなかった——

レイラが続ける。

「博士は、この星の歴史を研究しはじめてからおかしくなったんだ」

「歴史ねえ。歴史といたって、このクロエには、二百年より前の歴史なんてないのに」

サロウの言葉にイーヴァが頷いた。

「歴史なんてなくても、モノさえあれば人は生きていける」

「すべての『便利なモノ』は、地面の下にあり……」

エレンが歌うようにいい、

「深く掘れば掘るほど、新しく、壊れてないものが出てくるんだから」

「そこで、あたしたちのような『採掘集団』アース・ノッカーズが存在意義がある、というわけね」

そういつてサロウが話をしめくくった。

「みんな乗ったね？じや、いったん街に戻るわよ」

レイラは乱暴にサンド・バギーを発進させた。

大部分が砂漠の惑星クロエでは、高温と照りつける太陽を避けるために、岩肌をくりぬいた窪地に街が作られていた。

細く暗いトンネルをくぐると、人工照明に照らされた街が広がっている。

「どうでした？」

「皆の顔を見るなり博士が尋ねた。」

「ダメでした。重金属バッテリーが、いくつか見つかっただけ……」  
代表してイーヴァが答えた

「そう——見つからなかったのですね」

「でも博士、博士のいう『アダム』って何なのですか？長さ二十センチほどの金属のカプセルだとおっしゃいますが」

「『アダム』じゃなくて『アダム』ですよ、エレン」

「カプセルの名が『アダム』なのです」

「少し違いますね……わかりました。今日は、そのことについて詳しく話しましょう。サロウ、あなたは、今、いくつですか？」

「十五歳です」

「レイラは？」

「十四です」

「エレン？」

「十三歳」

「では——皆さんは、あと何年生きられると思いますか？サロウ？」

「長生きはしたいけど……あと五年ほどでしょうね」

「——そうです。惑星クロエの住人の平均寿命は二十歳。でも、本当は、ヒトは百五十歳までは生きられるのですよ」

「そんな！信じられません！」

「あなたが、そういうのはもつともです。エレン。でも、あなたたちは、本来、少なくとも八十年は生きられる——」

そういうと、ゆっくりと博士は皆を見回した。

「最初から話しましょう。私たちは、もともと、どここの生まれかは知っていますね」

「はい。惑星『地球』です」

「そうです、レイラ。それは前に話しました。今日は、その先を話しましょう」

そういって、博士は、テーブルに手を伸ばし、リモコンを掴むといくつかボタンを押した。

部屋の明かりが徐々に暗くなり、博士の前に、細く、白く美しい形の物体が浮かび上がった。

「これは、スワン型2251と呼ばれる宇宙船です。皆さんのご先祖は、地球から、これに乗って惑星クロエに来ました。しかし、旅の途中で、近くを通ったブラック・ホールの影響を受けて宇宙船が故障し、うまく着陸できずに、惑星に衝突してしまつたのです」

「衝突？」

「先端保護バリアと頑丈な本体のおかげで、宇宙船は壊れながらも、広範囲に内容物をまき散らし、地面深く何キロもめり込んだ後、地上に出ている部分が大爆発を起こしました」

「だから、地面を掘れば掘るほど、最新式の機械が出てくるんですよ」  
イーヴァが納得顔でいう。

「そうです。地表付近に散乱した機械類は、太陽による激しい紫外線と熱で、ほとんどのものが壊れてしまいました。しかし、地面深くにめり込んだ部分では、ほとんどの機械類は無傷です」

「そんなに激しい衝突で、よく乗組員が死にませんでしたね」

「死ぬはないのです」

「なぜ？」

「宇宙船に、人は、ひとりも乗っていなかったからです」

「人が乗っていなかった？」

「厳密に言えば、人としては乗っていなかったのです。かわりに、人の元となる『胚<sup>はい</sup>』が数多く積まれていました。ヒトを杯のまま運べば、食料も必要ないし、老化もしないからです。宇宙旅行は、それほど気の遠くなるような長い時間が必要なのですよ」

「胚<sup>はい</sup>って？」

「人のもとになるものです。爆発を起こしながら、かろうじて残った船のコンピュータは、最後の力で、なんとか地上付近に置かれたXX（ダブルエックス）胚から、あなた方の祖先を作り出しました」

「ダブルエックスって？」

「女性をつくる遺伝子の名前ですよ。そうして、最初の計画どおりに、惑星クロエに人類が生み出されたのです。しかし問題がありました。事故のために、宇宙船の真ん中に格納されていた女性杯しかヒトにできなかったのです」

「女性しか？博士、『しか』ってことは、他に何かあるのですか？」

「あります。男性杯です」

「男性？」

「あなた方が知らないのも無理はありません。ですが、本来、人間は、女性と男性で子孫をつくるものなのです。しかし、クロエでは女性しか生みだせなかったのです、今現在も、仕方なくクローンを用いたヒト複製で人類を増やしているのですよ」

「ああ、クローン部屋ですね。わたしたちの生まれた。でも不思議ですねえ。ヒトは皆、地球でも、クローンで生まれるのではないのですか？」

「違います」

「信じられない」サロウが呟いた。

「今まで、それでうまくいっていたのだから、このままで良いんじゃないんですか」

レイラが挑むようにいう。

「それがダメなのです。生き物には『多様性』が絶対に必要ですが、この星では、何度もクローンを繰り返すうちに、それが失われてしまいました。また、もともとの遺伝子も傷ついて、生まれてから二百年もしないうちに、あなたたちの寿命が二十年になってしまったのですから」

「このままだと、どうなるのでしょうか」

「今までにない事例なので、どうなるかはわかりません。しかし、このまま放置すれば、いずれ惑星クロエから人類はいなくなるでしょう」

その言葉に皆が黙り込んだ。

「心配しなくてもいいですよ。いま話した知識も、二ヶ月前に、イーヴアが地下で見つけてくれた記憶ユニットを、わたしにつなぐことができただから手に入ったのです。あきらめなければ、必ず男性杯アダムは見つかるはずです」

そういつて、博士こと、ドクター・ロボットは、人間顔負けの笑顔を作って見せた。

「博士」

しばらく、もじもじと下を見つめ、何かをためらっていたイーヴアが声を出した。

「なんですか？」

「『アダム』さえ見つければ、人類は死なくて良いのですね」

「そうです」

「——これを見てください」

イーヴアは、ポケットから平たい円筒を差し出した。

「二ヶ月前、メモリ・ユニットと同じ場所で、見つけたんです。博士の言っていた筒とは形が違いますが、蓋に読みづらけれど、『アダム』と書いてあるように思うので、もしかしたら……」

「お貸しなさい」

博士は、奪うようにイーヴァから容器をつかみ取ると、ゆつくりと調べ始めた。そして、細く長い、ため息のような音をだすと、続けた。

「盲点でした。たしかにこれは『アダム』です。わたしは、移住者の胚だけを探していたのです。あれは細長いカプセルでした。しかし、これは——宇宙船の交代用パイロットの胚です。数百年の宇宙の旅で、行程の無事をヒトにチェックさせるために、コンピュータが、たまにパイロットを生みだすことは知っていました。男性のパイロットを……」

「では、博士、これで『男性』というのを生みだせば、惑星クロエからヒトがいなくなることはないですね」

「そうですね。エレン。これから先、きっと、この星は多くの男女でにぎわうことでしょう」

「よかった」

アース・ノッカーズの女性たちは、口々に歓びの声をあげた。

それを穏やかに眺めていた博士は、やがて、手をあげて皆に注目を求めた。

「ところで皆さん。今までわたしは、この星に、数百いるクローン化補助ロボットのみひとり、ただの『博士』<sup>ドクター</sup>としてやってきましたが、今後は、わたしのことを『スネーク』と呼ぶようにしてください」

「わかりました」皆が口々にうなづく。

それを見て、おそらく誰も理解はできないだろうと思いつつながら、博士は最後に、こうつぶやいたのだった。

「アダムとエヴァが現れたら、楽園には、きっとヘビが必要になるでしょうから」

△了△